

## 興味の予先

道路建設会社に勤めていた父は、冬の間本社の事務所まで働いていたが、春から秋にかけて現場監督を担当していた。毎年その期間、父は、会社の自動車に乗って、月曜日の朝早く出かけて、金曜日に帰ってくる。



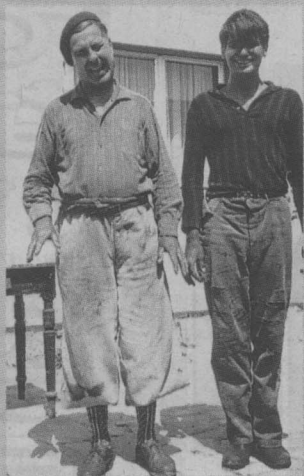
南山大学学長 ミカエル・カルマノ 9

とが多かった。勤務している間に毎年およそ5万キロを走っていた自動車は4年ごとに新車になったが、私は時々助手席に座って、父に仕事に連れていってもらったことがあった。日曜日に

家族そろって遠足に行く間に、溶剤を使ってアスファルトなどの成分を分析したりすることであった。その実験から得られたデータを処理するためにはハンドルを回す計算機もあったが、

学んだ時、なるほど思っていたが、その時は数学に対する興味はもつかなり薄れてきたし、道路建設に関わりたくない気持ちもどこかに消えていた。その代わりにと言おうか、小学生の頃から音楽と読書に興味を抱くようになった。読書は学校と教会の図書館から借りた児童文学の本から始まり、音楽との関わりは小学2年生ごろから始まったバイオリンの稽古から本格的になった。最初の先生は女子校で教えていたシスターであった。弓を弾いて、いろんな音を出すのは好きであったが、周りの人はそれをどう思っていたのかは不明である。ちなみに、最初の頃、五線紙を見ながらバイオリンを弾いていたが、音符の名称などは知らなかった。学校の音楽の授業で初めてこのような理論と出会って、「こんなことを何故知る必要があるのか」と思いながら、宿題と課された内容を二晩で暗記した。

## 特別な楽しみが原動力に



冬に備えて父と一緒に石炭を運ぶ(63年)

記憶に残っている父の作業の一つは、できたばかりの道路から丸いサンプルを切り取り、プレス

父は常に計算尺を利用してその結果をチェックしていた。数学の授業で足し算と掛け算の違いを教え込まれていた私は、何故足し算で掛け算の問題を解くことができるのか、と不思議に思っていた。ずいぶん後に、学校で対数の原理を

父は89歳の時、自分の子供達にお説教されて運転免許証を返上したが、あの時きっと「まだよくできるのか」と考えていたであ